

「天国のあの人へ メッセージを届けたい」の集いに参加

朝日新聞 2013. 3. 12. 朝刊報道記事

伝言を託し風船

名取市の閑上中学校前では、津波で亡くなった犠牲者へのメッセージを託した風船が放たれた。「津波は忘れても亡くなった多くの人を忘れない」。遺族たちは改めて誓った。

「届けー!」。妻(当時36)と長女(同14)、次女(同10)を失った桜井謙二さん(38)の合図で、約180個の風船がいつせいに空高く舞い上がった。風船には、遺族や亡くなった中学生の同級生らが「今も信じられませんか」「ありがとう」など、思い思いのメッセージを書いた。閑上中学校では、生徒14



「天国へ届け!」。参加者たちは、津波で犠牲になった家族や友人へのメッセージを書いた風船を飛ばした—名取市

人が犠牲になった。同校遺族会の丹野祐子会長(44)は、亡くなった長男(当時13)に宛てて、「生まれてくれてありがとう。助けられなくてごめんなさい」と書いた。

震災から2年。閑上地区では、覆っていたがれきが姿を消し、更地が広がる。しかし、丹野さんら遺族の悲しみは癒えない。「復興という気持ちにはなれない。まだ前を向けない」

ご遺族のお一人のことが載った朝日新聞 2013. 3. 11. 朝刊「天声人語」

天声人語

歳月は気まぐれなランナーに似ている。のんびり流しているかと思えば、一転、歩を速めて移ろいもする。ひと続きの時の大河に、私たちのささやかな命は浮き沈み、現れては消える。

震災被災者にとって、恐らくは激流のような2年が過ぎた▼いや、時は止まることもある。宮城県名取市の会社員、桜井謙二さん(38)の悲嘆を本紙で読んだ。妻(当時36)と長女(同14)次女(同10)を、マイホームもろとも津波に奪われた▼「みんな復興へと動いている。でも、私は家族を失ったという思いにとどまっています。そんな気持ちを口にすることも難しくなっている」。自宅跡の更地にたたずみ、3人との日々をただ感じているという▼「そのあとがある／大切なひとを失ったあと／もうあとはないと思っただあと／すべて終わったと知ったあとにも／終わらないそのあとがある」。谷川俊太郎さんが先ごろ、本紙夕刊「今月の詩」の最終回に寄せた「そのあと」だ。絶望を生き抜く者への励ましだが、静かに胸に迫る▼「そのあとは一筋に／霧の中へ消えている／そのあとは限りなく／青くひろがっている／そのあとがある／世界に そして／ひとりひとりの心に」。桜井さんの時間も、やがて、ゆっくりと動き始める▼先は見えない。だが見えずとも先はあって、被災者も、寄り添う国民も「そのあと」を生きてゆく。犠牲者は「私たちの分まで」と声をからしていよう。三回忌を区切りに行ける人ばかりではないが、今は前を向きたい。